

落合直文の和歌改良論の内実

— 御歌所派批判から雑誌『歌学』まで —

長 福 香 菜

はじめに

落合直文の和歌改良論については、従来直文に関する研究や短歌史研究において考察が加えられており、たとえば片桐顕智^①氏が、

〈前略〉直文の改良論は、「国学和歌改良論」の延長であり、
伝統的遺産の広汎なる総合である点、折衷派、又は総合的伝統主義といへよう。^②

と述べており、また小泉冬三^③氏が、「それは二十年代の和歌改良論を基礎とする代表的な新旧折衷主義であった。」と評しているように、「折衷」という言葉によってその特徴が言い表される。他にも、新聞進一^④氏の「新旧和歌の折衷、合同による漸進的な改良」や、藤岡武雄^⑤氏の「漸進的な、折衷的な改良主義」といった見方がなされているように、直文の改良論を「折衷」として意味付ける点において、ほぼ一致した見解が示されているように思われる。さらに永岡

健右氏^⑥は、

直文の士族としての美意識と国学者としての伝統性尊重の資質は、意識では急進的な和歌改革の必要性を感じながらも、人間関係の渦まく和歌壇では微温的な和歌改革の立場しかとり得なかったのである。御歌所派と海上胤平を代表とする対立の構図の中で、直文の主張は両者の融合調和を図る場の提供にその存在感と意義を見出していたのであり、ここに和歌改革を意図していた鉄幹の不満もあったというべきであろう。

直文が、「あさ香社」で与謝野鉄幹、服部躬治、久保猪之吉、尾上柴舟、大町桂月等を育成し、また「いかづち会」「わか菜会」「あけぼの会」等で若い歌人を指導した近代短歌史上の意義は無視出来ないが、万事に折衷的立場の主張は、急進的改革派の若い人々にとって不満を残すものであったのである。

と、明治二十六年に結成されたあさ香社における門人育成に関して

は「近代短歌史上の意義」を認めてはいる。しかし、「両者の融合調和を図る場の提供」に利点を見出す直文の折衷的立場は「微温的」であるとし、そこに「鉄幹の不満」があったことを指摘する。そして本林勝夫氏は、次のように述べている。

明治の歌が旧時代の陋習を離れ、ようやく「近代」への方向をとるのは、二十六年、落合直文の「あさ香社」の結成を出発点としてであった。あさ香社は一定の主義主張を掲げず、また特定の機関誌も持たなかったが、直文の革新への意図はそれまでの言説からはほぼ明らかで、要するに明治の新しい歌は若い世代の創出に待たなければならぬというのである。あさ香社の活動は二十年代末期までのわずかの期間で自然解消の形となったが、ここから出た鉄幹をはじめとする青年たちは、三十年代に入ってあいついで新派の結社を結成し、明治の革新歌壇を形成する。直文自身の歌はよく言えば調和的、わるく言えば微温的な域を出なかつたし、その意味で彼の功績は、一にも二にもこれら革新歌人たちの温床を作ったところにあつたと言うべきだろう。

直文の歌を「調和的」「微温的」とする一方で、「若い世代の創出」への尽力を評価している。このように、あさ香社は、与謝野鉄幹に代表されるように名高い門人を輩出したことで知られ、そのことがあさ香社の功績として称えられていることから、直文はあさ香社の

指導者としての存在が大きく評価されているのである。

直文の折衷的立場に立つ和歌改良論は、よく鉄幹の革新論と比較され、否定的に評される。しかし、それは直文の改良論を体系的に捉えた評価とは言い難く、新派の立場から見た、安直かつ一面的見解に過ぎない。つまり、当時直文が抱えていた主義主張や問題意識から和歌改良論提唱に至る経緯、そして改良論が展開されていく当時の歌壇状況^⑤とを包括した上で直文の改良論を見なければ、折衷的立場の本質は見えてこないはずなのである。よって本稿ではまず、明治二十二年から同二十六年までの改良論を年代順に掲げ、改良論の内実を鉄幹が登場するまでの直文の発言から読み解き、折衷的立場の背景についての考察を試みたい。

一

「萩の家主人追悼録」(『国文学』六十二号、明治三十七年二月、以下「追悼録」と略す)に、御歌所寄人の阪正臣による談話が収録されている。直文と正臣は伊勢神教院時代に出会って以来、交遊関係が続いていたようである^⑥。

正臣が御歌所へ出て、二年ばかり立った時(明治二十二年頃)尋ねて来て言はれるには、「御歌所の連中の歌は孱弱だ、野鄙だ、大に革新すべしだ」といはれる。此の時直文君の歌論は旧派の頂上とも思はれるやうなもので有った。正臣は反対の考で有つ

た故、負けぬ気で争つた。そこで直文君は、此奴共に語るに足らずとも思はれたか、以後歌の話は聞かなかつた。

正臣はこの談話で、直文が当時の歌壇の中心勢力であった御歌所派の歌を批判し、「革新」すべきとの発言をしていたことを明らかにしている。しかしながら、そんな直文の歌論を、正臣は「旧派の頂上」と評している。つまり、「革新」を促す直文自身こそ旧派と称される位置にいたとの認識を、正臣が示していたということである。

明治二十二年、そもそも直文はなぜ御歌所派批判を行ったのであろうか。同時期に直文が発表した言説から、この発言の背景にある問題意識を探ってみよう。この当時直文は、欧米の文明を理想とし、自国の文化から欧米化へと転換を目指す日本の風潮に疑問を呈する発言を度々行っている。たとえば、「日本文学の必要」(『日本学誌』一号、明治二十二年二月、『著作集I』収録)では、次のように述べている。

世人口を開けば皆曰く、「欧米諸国の文明や、我国の遠くおよぶところにあらず。故に政事、法律はさらなり、言語に風俗に悉く欧米風に変換し、我古来の習慣に教育に之を放棄し、はやくその域にいたらむことをつとめざるべからず」と。

この状況に対し、直文は日本文学を蔑ろにしての文明の進歩は望めないことを主張する。

〈中略〉故に我国の文明をはからむとせば、国体に風俗に習

慣にそのよりて来るところを詳にし、以てその基本を定めざるべからず。ざるを世人皆かの文明に眩惑し、反て之を破壊せんとするがごとき、何ぞその論の暴かつ疎なるや。〈中略〉

我国のありさまの今日の如く極端に偏する原因をたづぬるに、彼を知り、己を知らざるに外ならざるなり。そのはじめにあたり、我国の国体、歴史、地理、人情、教化、風習のなたるを知らむには、かゝる皮相的の文明には陥らざりしならむ。往時またおふべからず。今日之をさとらずば、いよ／＼なすべからざるに至らむ。これ予輩の日本文学の必要を感じし所以なり。自国の文明を意図するなら、ただ全面的に欧米を模倣するのではなく、従来自国で培ってきた「国体、歴史、地理、人情、教化、風習」に立ち返り、日本独自の文明の基本を新たに築くべき旨を訴えるのである。同様の発言は、以下にも見受けられる。「帝國文科大学に新に国史料を設置せられたるにつきて」(『日本文学』十二号、明治二十二年七月)では、国史料設置を祝す言を述べた上で、

すべて学者たる者は、おのれに定見を備ふといふ。きはめて緊要なり。反言すれば、学問に籠絡せられざるべしといふことなり。若、定見なくして、之を学び、之を得るもの、一の書籍たり、一の図書たるに過ぎざるべし。この弊は、ことに和漢学者に多かりしが、現今にては、洋学者もまたその轍をふむが如し。唯各取るところの主義のことなるより、その弊も亦各その類を異

にし、一は頑固となり、一は軽薄となり、各極端に走りて、氷炭相容れざる者のごとし。かくてこれに陶冶せらるゝ人物も、また各その極端に走り、その結果たるや、互に誹謗をきはめ、その為すところの事業にいたりても、一方は西洋の思想にのみ是取り、一方は陳腐の説にのみ拘泥し、其能く社会発達の原則を知り、これが材料たる沿革、及、事実を基礎として、完全なる日本文学者の一機軸を開きたるものを見ず。

と「洋学者」の弊害を指摘し、「社会発達」の「材料」である「沿革」「事実」を根幹として新機軸を打ち出す「日本文学者」がいないことに言及する。その上で、学生に対し「漢によらず、仏に偏せず、洋に溺れず、常に国家、国体、人情、風俗等すべて日本たる思想を脳裏に据ゑることを求めた。さらに「日本主義の未来」(『明治会叢誌』十三号、明治二十二年十二月、『著作集Ⅲ』収録)においては、日本国に生まれ、日本人である以上は当然日本主義の立場をとるため、本来そのような呼称は不要であるが、今日あえて日本主義を称するのは、日本主義の衰退と外国主義の隆盛を危惧するからであるとの立場を取る。以下、特に西洋主義の移植を警戒し、日本主義の再興、そして維持を唱えている。

回顧すれば、維新以来西洋主義いたく行ハレ、政治に法律に宗教に文学に其の他有形と無形とを問はず、事の大と小との別なく悉く彼に模倣し、一も西洋、二も西洋、四面只旧物破壊の声

のみなりしは、諸君も共に熟知せらるゝならむ。あはれ、この世ハいかにかなるならむ。あはれ、この国土ハいかにか変ハるらむ。風俗はいかに、習慣ハいかに、と案じ煩ひたるに、その勢いよ〜猖獗をきハめ、明治十六年に到りて極れり。予輩ハその主義の国家に利ならざるを知り、その風潮の国家に害あるをさとり、同志と謀りて、或ハ之れを論議し、或ハ建言したり。されどその勢力の微々たる、遂に西洋主義に抗すること能はざりしなり。

その後、運命いよ〜拙く、同志中にも多くは職業をかへ、主義を変せしが、そのうち最も頑固に最も強情なりしもの残り居て、今日日本主義の行はるゝ時期に際会したるなり。

〈中略〉今の時にあたり、国体の何物たるを明にし、道德の何物たるを知らしめ、歴史より言語より之を論じ、之れを説き、以て国人一般の頭脳に真正の日本主義を注入し、さて始めて、安全といふべきなり。

明治二十二年を日本主義再興の時期とし、再興のためには、「歴史」「言語」を用いて「国体」と「道德」を説く「真正の日本主義」注入が肝要であるとしている。

つまり直文は、西洋主義の導入によって近代化を図ろうとする国内の風潮を懸念し、自国古来の、また固有の国体や歴史、文学などを見直し、それらを立脚点として本物の日本主義確立を目指してい

たのである。それによって、国家・国民の意識を發揚し、西洋主義傾倒からの脱却を意図していたと考えられる。

また、翌年「道德に付きて」（『明治叢誌』十六号、明治二十三年三月、『著作集Ⅲ』収録）では、西洋国は「自由国」でありながら「宗教」によって「道德」が「支配」されているとする。一方、日本は「自由主義」のみを取り入れて「宗教を忘れ」ているため「不道德社会」となっている現状にあることを指摘し、西洋主義撰取による影響を述べている。そして、

歴史上忠臣、義士、孝子、節婦の言行を録し、こをかたりきかしめ、又その人々の歌、又それに関したる歌を新に詠み、以て朝夕唱道の便に供し、又その人々の歴史につきたる図画をつくり、之れをみせしめんには、いかに。世人はいづれもいささけきわざと思ふめれども、その効力にいたりては、実におびたゞしからむと信ずるなり。

と言い、「不道德社会」から脱出し、失われつつある日本人の道德心を取り戻すための手段として、歌の奨励を行っている。さらに、三年後の「国学者と徳育との關係」（『明治叢誌』四十九号、明治二十五年十二月、『著作集Ⅲ』収録）でも、

我国文学は、その歴史を究研する学問なり。我国語国文を究研する学問なり。国語の学をして盛ならしめむか、国人おのづからその国を愛する情盛ならむ。国文の学をして盛ならしめむか、

国人またおのづからその国を愛する念盛になりゆくならむ。歴史の学をして盛ならしめむか、国人またおのづからその国を愛する情及び念盛になりゆくならむ。我国体は、いかなる国体か。我君王はいかなる君王なるか。我臣民はいかなる臣民か。父子はいかに。夫婦はいかに。兄弟はいかに。朋友はいかに。一の歌をよむも、一の文をよむも、一の歴史をよむも、おのづから分明ならむ。言をかへていへば、我国文学は、我国徳育の基礎なり。

と述べている。「国語」「国文」「歴史」の振起を図ることが、愛国心の涵養へと繋がる、それこそが「徳育の基礎」であるという。ここでもやはり、道德の定着を図ろうとしており、その手立てとして歌を挙げている。よって、日本主義再興には「徳育の基礎」である国文学が重要な役割を担い、歌もその一役を担うとの考えを示しているのである。

森鷗外は「追悼録」で、「落合君の思想は、純日本思想でありました。」と回顧している。直文は、西洋化の流れに対抗するには国文学の台頭が必須であると考えていたからこそ、決して既存のものを墨守するのではなく、それを基礎としてさらなる發達を必須としていたことは間違いない。あくまで「純日本思想」に基づきながら、その先に發達を見ていたのである。しかしながら、直文による御歌所派批判の根拠とその詳細を知りうる資料は、まだ見つけられてい

ない。管見の限り、直文が御歌所派の歌を批判した背景には、おそらく西洋主義の移入という社会状況が存在する。つまり直文は、歌においても伝統に固執するのではなく、立脚点として伝統を位置付け、發達を目指したのである。だからこそ、当時の歌壇の筆頭でありながら、危機感も使命感も乏しい御歌所派を批判するに至ったのではないだろうか。

二

では、実際に直文は当時の歌壇状況をどのように概観していたのであろうか。御歌所派批判がなされた同年、直文は「いさり火」(『東洋学会雑誌』三編四号、明治二十二年四月、『著作集1』収録)を發表している。

詠歌者流に党派あること、猶政治に政党あるが如し。守旧といひ、漸進といひ、急進といひ、自由といひ、各筆陣を張り、論鋒を戦はし、互に相下らざる者の如し。守旧党は、万葉の城郭に籠りて出でず、保守党は古今新古今の諸柵をこえ、今や香川の嶮にまです、みたれど、伏兵のあるをおそれ、猶躊躇するに似たり。急進党は、おほくは若武者連にて、更に煉瓦の城壁を築き、弓矢、刀槍をすて、銃器を携へ、一撃以て四面の敵を襲はんとするが如し。自由党は、よるべき城郭もなく、たよるべき弓矢、刀槍もなく、又これに代ふべき銃器もなく、只血

気の勇にはやり、無暗にも矢鱈にも戦を挑み居れり。(中略)されど試にいはん、守旧党の本陣なる万葉の城郭は実に堅固なり。おほくの巨砲を以てこれを攻むるも陥ることなきは明なり。只こそ守らんの兵法はありやなしや。武田上杉の兵法は、昔日にありては其妙鬼神もあざむきしならむ。されど、今日の戦争にも、こを行はんといはざいか。恐らくは機をみるをしらずとのそしりあらむ。漸進党の論もよろし。されどその熟練は短歌にあるのみ。長歌の如き、すて、顧みざるはいかに。たとへば柔術の一法をえて、刀槍、弓矢、砲銃皆無用なりといふがごとし。共に兵を談するにたらざるなり。急進党は勇は勇なり。されどその経験に乏しきをいかにせん。自由党は、兵法兵略の何にたるをしらず、只戦を好むのみ。勝をうる能はざるは勿論、一敗血にまみれざれば幸なり。そもく戦争は、経験を要する者なり。また熟練を要する者なり。また変化を要する者なり。又利器を要する者なり。又城郭も地理も扱ばざるべからざる者なり。さては今後詠歌の戦場に出て、花々しき功名手柄(マメ)をなす者は、こを具備したる英雄にあらざれば、能はざるなり。この中で、歌人社会における「守旧」「保守」「漸進」「急進」「自由」党の存在を指摘し、党派間で論争が起きている状況を述べている。「守旧党」は万葉集を、「保守党」は香川景樹をそれぞれ尊重する立場である。「漸進党」は段階を経て徐々に進歩を図ろうとし、「急進

党」は急速な改良の実現を目指す立場にある。そして「自由党」は
抛る歌集や歌人もなく、明確な目的意識を持たない立場を指す。直
文は、これら各「党派」の特徴を戦争にたとえて説明しており、勝
つためには、それぞれの短所である「經驗」「熟練」「変化」「利器」「城
郭」「地理」を補い、これら全てを備えなければ、「詠歌の戦場」で
勝つことはできないという。このように直文は、各「党派」の長所
と短所を心得ており、それらの合同が必要であることを認識してい
た。また、「漸進党の論もよろし」、「急進党は勇は勇なり」と、改
良推進の二党を肯定的に見ていることから、改良の必要を感じてい
たことは僅かながらうかがえるが、御歌所派を取り立てて批難する
ような立場は示していない。

約一年後の「各地方に国史国語の講習所を設くべし」（『大八洲学
会雑誌』巻四十四、明治二十三年二月、『著作集Ⅲ』収録）においては、
歌は本邦固有の文学にして、敷島の道とさへ称へこしものなれ
ば、物ぞきの業とのみなさず、ます／＼發揮せしめて、当世
を益するやう奨励ありたき事

と、「物ぞきの業」となっている歌学社会の現状を否定し、世の中
に有用な歌を望む直文の考えが知られる。また同年、「国文国詩を
論じて世の文学者に望む」（『日本評論』六号、明治二十三年五月、『著
作集Ⅰ』収録）の冒頭では、「漢文漢詩廢れて国文国詩大に起りぬ。」
と述べるが、その割に「国文国詩」の実力が伴っていない状況に言

及している。

国文国詩かくの如く盛にして、其国文国詩の更にみるべきもの
なきは、その原因種々ならむ。されど其おもなるものは、文学
の学理および思想に富むものは国文国詩のなたるをしらず。
又国文国詩に従事するものは、その学理に、その思想に乏しき
が故ならむ。なにをか文学の学理・思想にとむものは国文国詩
のなにもものたるを知らずといふ。見よ、近年文学上におこりた
る議論を。また見よ、その人々のつくりたる詩文を。予はその
議論のたくみにして、その詩文の拙劣なるにおどろかざるべか
らざるなり。要するに国文国詩を講究せざるによるのみ。なに
をか従来国文国詩に従事するものは学理に乏しといふ。
見よ、従来国文学上における国学者の議論を。また見よ、その
人々のつくりたる詩文を。予はその議論の拙に、従ひてその詩
文の陳腐なるにおどろかざるべからざるなり。要するに国文国
詩の目的をあまりたるのみ。〈中略〉

今日の文学にして果して善良なる發達を遂げんか、我歴史上未
曾有の文学のあらはるゝのみならず、他の欧米および支那文学
に比較するも決して劣ることなきにいたらむ。

予は熱心にまた誠実に世の文学者に望まほしきは、各自虚心平
氣以て国文国詩を講ぜられんことなり。

「学理・思想」に富む人々の「詩文」を「拙劣」、「国文国詩に従

事する」人々の「詩文」を「陳腐」と評し、文学の「発達」を遂げ
るべく、「世の文学者」に「虚心平氣」をもって「講究」すべきこ
とを訴える。

このように、様々な流派や「物ずき」「世の文学者」によって創
出される閉鎖的な歌学社会を脱し、歌道の拡充を図ろうとする直文
の姿勢が看取される。それは、『新撰歌典』と『歌学』によって具
体的に示されることとなる。

三

明治二十四年、直文、小中村義象、萩野由之、増田于信の共著で、
『新撰歌典』（博文館発行）が刊行され、これによって改良論がより
詳らかとなる。冒頭には、直文による「緒言」が掲げられ、十八項
目から成る。その第一項目では、

一この書は、はじめて歌を修めむとするもの、ために著したる
ものなり。さては類語作例の如き、すべて解し易きもののみ
を撰びたり。かの巻首の沿革の如き、作法の如き、書式の如
き、巻尾の枕詞の如きも、充分にか、まほしかりしかど、中々
にわづらはしくやなりなむとて、大かたになしおきたり。猶
くはしくは、更にものするところあらむ。

と、『新撰歌典』は歌を学ぶ初心者のために編まれ、「歌の沿革」「歌
の作法」「歌の書式」「類語及び作例」「枕詞」から構成されているこ

とを示す。「緒言」では他に、従来の歌書が四季、恋、雑と部立て
されていることに對し、四季を十二か月に分けることや、長歌や今
様歌、旋頭歌を興すこと、歌題については旧題と新題の取捨等を掲
げる。第八項目では、作例について述べている。

一歌よみに数派あり。真淵派といひ、景樹派といひ、なにの派
といひ、くれの派といひ、各好むところを以て、相争ふがこ
とし。そは甚だいはれなき事といふべし。真淵翁の歌といへ
ども、よきもあらむ、あしきもあらむ。また景樹翁の歌とい
へども、たくみなるもあらむ、つたなきもあらむ。よきはよ
く、あしきはあしく、巧みなるはたくみに、つたなきは拙き
なり。〈中略〉この書の作例は、歌のよきものはこれをとり、
人を區別せず。

詠歌者には「真淵派」「景樹派」をはじめとして様々な流派が存
在し、その流派間での争いが生じている状況をふまえ、直文は、真
淵の歌も景樹の歌も、良し悪しがあれば巧拙もあるとした。よって、
流派によって優劣を判断すべきではないとの見解を示し、作例では、
どちらにも偏向せず、良い歌を掲げていることを述べている。「真
淵派」「景樹派」と名指しているのは、当時の二派間における対
立の大きさを物語っていると見えよう。「歌の沿革」では、歌道の
歴史の概要について記されている。

維新以降、文学大に進歩し、百般の事業、皆改新するにつきて

は、歌の改良も文学上の一大問題となり、唱歌、新体詩等、陸
続世に出づるに至れり。あはれ古を鑑み、今を照し、以て王朝
の風雅を興さんは、これ誰のつとめぞや。われくは、こそ
将来の青年諸子に望まんとするなり。

維新後の文学の「進歩」と「改新」を認めると同時に、「歌の改良」
の問題を提示する。伝統を土台にしなが時代に即して改良を図ろ
うという意図が看取され、その実現を「青年諸子」に期待している
ことがうかがえる。伝統に立脚する姿勢は、たとえば「歌の作法」
の「作例の事」で示される、初めて歌を学ぶ人は「古歌」を模範に
するべきだとの見解にも表れている。

歌をよむには、古歌を見ならはずは、道に入りがたし。貝原益
軒の如きは、年八十に及びて和歌に志し、先づ古今集を暗誦せ
りといふ。多く古歌を知らざれば、自在に取りまかなふこと能
はず。但その集は、初心の中には、近頃頃の人の類題集より入
り、や、熟して後は、代々の勅撰、さては各の家集にも分け入
るべきなり。すべて我おもひよりのあらむだけは、自らその風
情を案じて、よみ出づべきことなれど、初心の間は、さもなり
がたきものなれば、初は類題、その他の作例の書につき、彼所
を少し取り、此所を少し取りつゝ、一首につゞりなすも一の方
便なるべし。これ古歌の中を剽窃すともいふべけれど、全く初
学の間のことにて、かくしてよみたるを、我歌として集にのせ

むといふにもあらず。只稽古習学のためなれば、さして害な
るべし。かくする中に自然と習熟すれば、はては己がものとな
りて、さまざま新機軸を出すことを得るに至るべし。

まずは「古歌」に倣い、修練を積むことによって基礎を築かな
ければ、「新機軸」を打ち出すには至らないのである。

このように『新撰歌典』では、流派によって甲乙を付けることは
せず、両派の良いところはともに取り入れながら改良を図るという
方向性が示されていると言える。そして、その根本にあるのが、伝
統を忘れないということであろう。

四

『歌学』は、久米幹文、小中村義象、直文を監督とし、金子富太郎（元
臣）、佐野鉦次を幹事として、明治二十五年（一八九二）三月に創
刊され、方針を次のように掲げた。

一 歌学は学術上より歌学に関する事項を報道論議する歌学専門
唯一の雑誌にして、汎く公衆に発売する学術的の雑誌なり。

直文は、『歌学』発行の中枢を担っており、それは直文が、創刊
号で「発行の趣旨」として「賛成のゆゑよしをのべて歌学発行の趣
旨に代ふ」（『著作集Ⅰ』収録）を述べていることからもうかがえる。
この中で、直文は十八点もの「ゆゑよし」を掲げ、『歌学』発行の
意図を明らかにしている。以下、十八項①〜⑱の概略を列挙した。

- ① 国文学者が歌学の隆盛を図る。
 - ② 若者への短歌の普及。
 - ③ 短歌雑誌の必要性。
 - ④ 歌学社会に「無私無偏」の大きな団体を作る。
 - ⑤ 昔と現在の歌学を後学者へ授ける。
 - ⑥ 詠歌者の質問や添削に応じる。
 - ⑦ 詠歌者は自国の文学の歴史を認識する。
 - ⑧ 長歌を興す。
 - ⑨ 今様歌を興す。
 - ⑩ 音楽と歌学を合体することについて研究する。
 - ⑪ 歌は「古き」または「新しき」のどちらに拠るべきかの意見を聞く。
 - ⑫ 歴史や伝記等の叙事歌を盛んにする。
 - ⑬ 五七や七五調の他に、四・六・八の句を作ることの是非について研究する。
 - ⑭ 歌詞の制限を守ることの是非について研究する。
 - ⑮ 自国の歌と中国や西洋の歌との比較研究。
 - ⑯ 訳詩の善悪を判断する。
 - ⑰ 古来の歌学者の長所短所について議論する。
 - ⑱ 雄壮活発な歌の詠作。
- 直文は当時の歌が抱える問題を提起し、改良項目を具体的に掲げた。これらについて議論し、解決を図ることが『歌学』発行の目的

であったと言えよう。以下、②～④の引用を行う。

② 歌は、今日さかりなりといふ人もあらむか、されどそは、ある部分にさかりなるのみ、国人おしなべてはいかゝあらむ。かのやんごとなき公達のたはぶれ、かの世をそむける老人のたのしみ、おのれはそれらを以てこの学のさかりなりとはいはざるなり。おのれは、この高尚なる歌といふものを、すべての国人、ことに青年有為の人々へのぞまむとするなり。これ、われ／＼のこの挙に賛成したるゆゑよしなり。

歌が「公達のたはぶれ」や「老人のたのしみ」として慰みものとして化している現状を憂い、若者にこそ詠んでほしいと期待する。前掲『新撰歌典』の「歌の沿革」と同様のことをここでも述べている。直文が若者に託す短歌普及の願いは、やがてあさ香社結成につながっていくこととなる。

③ 歌さかりならずとせば、そをさかりにせざるべからず。そをさかりにせむには、種々の方法あるべしといへども、雑誌などそのおもなるものならむ。われ／＼のこの挙に賛成したるゆゑよしなり。歌をさかりにせむには、大なる団体をつくらざるべからず。そのゆゑはいかにといふに、一人一箇にては、ある一方に偏することをお免れさればなり。今日歌学者社会にきくに堪へざるあらそひあるも、それがためなり。こは歌学のため利益なきのみならず、中／＼にその害すくなからず。これに反して、一の大

なる団体をつくり、種々の歌をあつめ、千紫万紅ののうちより最もよきものを見出し、それにならひ、それを学ばむか、無私無偏、その益するところまことにおほからむ。これ、われ／＼のこの挙に賛成したるゆゑよしなり。

③と④では、短歌雑誌の必要性を説く。「歌」を「さかり」にするための方法は雑誌であり、雑誌が歌を繁榮させる場所としての役割を担うことを表明した。また、一流派に偏向しているからこそ争いが生じているとし、『歌学』は、「無私無偏」の「大なる団体」としての役割もまた担っていたと考えられる。

『歌学』二号（明治二十五年四月）には、「歌学者の偏僻」（『著作集』収録）と題される一文が掲載されている。

歌学第一号世に出でたり。第二号よりはいさ、か歌学に関したる愚見をのべむと思ひわたれりしに、こゝに一言せねばならぬこと出で来れり。そは第一号をよみて、人々よりいひおこされたることどもの、きはめておほかりしことなり。〈中略〉われ／＼は悉く諸君の論に従ふこと能はずといへども、いづれも歌学をおもふ熱心より出でたるものなれば、そをありがたく思ふと同時に、そのよきものとはとり、あしきものはぶぎ、おひ／＼に実行せむと思ふなり。たゞこゝにいふべからざる偏僻論者あり。

『歌学』創刊号に対して、様々な意見が多数寄せられたことに感謝しながらも、それらの意見を取捨選択していく姿勢を示した。し

かしその中に、「偏僻論者」がいることを指摘している。以下、詳しく見てみる。

偏僻とは何ぞや。何のために香川景樹の伝を載せたるかといふ論なり。何のために賀茂真淵の伝を載せざるかといふ論なり。その論者は、東京にありて、地方にありて、皆歌学を以て自ら任ぜらるゝ人々なりとか。われ／＼は歌学者中偏僻論者のあるよしは、かねてき、およびしところなり。されどかくまで偏僻の論者ありとは知らざりしなり。

偏僻とは何ぞや。真淵の歌は巧なり。景樹の歌は拙なり。その差霄壤、決して比較すべきものにあらず。さるを真淵と景樹との比較はいかに。又、人麿の神髄を得たりといふもの、中に、真淵の名ありて、景樹の名の見えざるはいかに。共に歌学者の言とも思はずといふ論なり。〈中略〉

はじめの偏僻論者は、世に所謂真淵派といふものならむ。次の偏僻論者は、世に所謂景樹派といふものならむ。われ／＼は、はじめの偏僻論者に答へむ、「われ／＼の景樹の伝を載せたるは、景樹は実にたふとぶべき歌人なればなり。真淵の伝を載せざりしは、その伝記いまだとゞのはざればなり。決して景樹をのみあがめて、真淵を貶したるにはあらざるなり」と。われ／＼は次の偏僻論者に答へむ、「真淵の長所とするところ、景樹の短所なり。景樹の長所とするところ、真淵の短所なり。長

短各ことなれり。その比較如何といへるのみ」と。又、答へむ、「人麿の神髓を得たるは、実に真淵にして、景樹にあらねば、真淵を出して、景樹を出さざるなり」と。真淵の伝記を載せむと欲せばそをかきてよ。景樹、真淵にまされりと思はゞ、そを論ぜよ。

景樹、果して人麿の神髓を得たりと思はゞ、こもまた論ぜよ。

前者の「偏僻論者」は「真淵派」に立ち、「景樹の伝」を掲載して「真淵の伝」を掲載しないことについて批判している。一方、後者の「偏僻論者」は「景樹派」に立ち、「真淵の歌は巧」「景樹の歌は拙」とすることの「比較」について問うており、また景樹も「人麿の神髓」を理解しているとの意見を寄せている。直文は両者の意見に対して、景樹を尊敬して真淵をおとしめているわけではないとし、また真淵と景樹ともに「長所」と「短所」があるというように、どちらにも偏向しない雑誌としての立場を強調していることが分かる。そして、次のように締めくくる。

あはれ、遠き神代のむかしより、この歌おこり、世々そのあとをたゞざりしに、その割合におもしろき発達をとげざりしは、いかにぞや。何流といひ、何派といひ、何風といひ、一小局部に齷齪し、一小版囲内マヤに拘泥したればなり。そはすべて昔しの夢なりけりとおもひしに、今猶かゝる偏僻論者マヤのあるあり。歌学の前途おもひやれば、実にあはれなるものなり。われ／＼は愈振ひ起りて、この学の發達をはからでやほ。

自らが依拠する流派や作風という狭小な場所や範囲に固執するあまり他派を非難するような「偏僻論者」の存在を全面的に否定し、それを払拭しなければ、歌学の發達は望めないことを断言するのである。

続いて、『歌学』七号（明治二十五年九月）「歌は目にて見るべきものか。耳にて聞くべきものなるか」（『著作集Ⅰ』収録）を見てみる。

古の歌は、耳にて聞きたれど、今の歌はおほくは目にて見るなりとは、予のかねて論ぜしところなり。歌は耳にて聞くべきものなるか、目にて見るべきものなるかといふに、歌といふ以上は、きくべきものにて、見るべきものにあらずといふ事も、予のかねて論ぜしところなり。古の歌は歌の真理にかなひ、今の歌はともすれば歌の真理にそむけりといふも、予のかねて論ぜしところなり。真理にかなふ歌をおこし、真理にそむく歌を退けざるべからずといふことも、予のかねて論ぜしところなり。この論にして実行せられざらむには、恐らくは、歌の最もたふとぶべき調といふものも、遂にあとなくなりゆくにいたらむか。調を貴ぶ直文は、古歌こそが「歌の真理」にかなった歌であるという。よって、古歌は耳で「聞くべきもの」であると同時に、調が備わっているというのである。

『歌学』二卷一号（明治二十六年一月）では、「我歌学の取るところ」（『著作集Ⅰ』収録）を発表している。

氣運とはいかに。守旧派はいづこまでも守旧、改進黨はいづこ

までも改進、その間、氷炭相容れず、弁難攻撃またのこすところなし。〈中略〉守旧派は曰く、「歌学はやゝ世の風潮に流さるゝに似たり、さる事ありてはよろしからず」と。改進派は曰く、「歌学は純乎たる守旧派の連合体のみ、共にかたるに足らず」と。いづれも一理あることにて、おのれ等は、これをすてず。されど、また悉く従ふことも能はざるなり。

直文は「守旧派」と「改進派」の背反する關係を示し、その論争の激しさを述べた。あくまで偏向しない立場を主張する『歌学』の雑誌としての姿勢は、「守旧派」の立場としては改良を求める気運に押されているように見え、一方「改進派」の立場からは「守旧派の連合体」のように見なされており、両派からの相容れない意見が寄せられていたことがよく分かる。それらの意見に対して、直文は次のように答えている。

おのれ守旧派に向ひては、左の如く答へむと欲す。

世の守旧派と称する徒は、三十一字の小天地に踞踏して、長歌をよむことだに知らず。たま〜見するも、そを味ふことだに知らず。従来行はれ来れる歌体にして、猶しかなり。句を変じ、調をあらため、以て新面目をひらくなど到底望むべからず。おのれの考ふるところによれば、今日のありさまにては、この歌といふものは、遂に青年の手をはなれ、ふたゝび隠居の一遊戯に属するに至らむか。おのれ等、容易に守旧派の論に応ぜざ

る、その意全くこゝにあるなり。

おのれ改進派に向ひては、左の如く答へむと欲す。

世の改進派と称する徒は、三十一字の歌だにうたふこと能はず。今様だに作ることはせず。ことに長歌のごとき、素読さへ出来ぬもののおほきにあらずや。たゞ欧詩の美なるにおどろき、一もなく二もなく、さる歌をつくらむとするのみにて歌にならず。歌は歌をよむものにあざればよむべきものにあらず、よまるべきものにあらず。改進派は常にいふ、「歌よむ者は、多くは迂遠なり。その迂遠なる人とはかりては、何の日かその進歩を見るを得む」と。さなり、されど、歌を知らざる人の論に従ひ、この歌の進歩をはからむには、中々に歌を傷け、歌を蕪雜に陥らしめむのみ。おのれ等、容易に改進派の論に應ぜざる、その意全くこゝにあるなり。

以上のべたる如く、おのれ等、守旧派に従ふものにあらず、また改進派にそむくものにあらず。たゞ物に順序あり、その順序を守りて、おひ〜にその進歩をはからむとするものなり。〈中略〉こゝにあまねく同志とかたらひ、大にこの道の進歩をはからむと欲す。あはれ、この歌学を愛読せらるゝ諸君よ、論あらば寄せ給へ、説あらばきかせ給へ。おのれ等歌学の門をひらき、よろこびて相待たむ。

「守旧派」に対しては、三十一文字に固執しているだけで、句や

調の新味を期待することはできないとし、「改進黨」に対しては、歌を詠うことさえできないにもかかわらず、進歩を意図すれば、歌を傷付け、「蕪雜」にしてしまうという懸念を抱いている。よって、「守旧派」に準せず、「改進黨」にも反対しないと云ってはいるが、「おひ／＼にその進歩をはからむ」ということも述べている。そのためには段階を踏まなければならないとしていることから、直文の中では必ずしも「進歩」と「改進黨」が直結しているわけではない。直文にとって、急激的な変化ではなく、「順序」を踏む穏やかな「進歩」が重要であったということであろう。

『歌学』は、『新撰歌典』同様、「景樹派」と「真淵派」における流派間の争いを否定する。「守旧派」と「改進黨」の対立については、互いの長所と短所を認識し、伝統を顧みながら徐々に進歩を図ろうという直文の考えが知られる。

また『歌学』は、歌を繁榮させるための手段として刊行され、流派の別なく、様々な歌学者が融和を図る場を提供するという方針を打ち出したが、約一年で終刊を迎えてしまう。改良問題を提示しながらも、偏向の無意味さを主張し、折衷的立場であることを雑誌運営に活かそうとした意図はうかがえ、その意識は終刊までの間は保持されたと言っている。景樹派「真淵派」、または「守旧派」「改進黨」の各どちらかの立場を明確にすれば、雑誌の運営に支障をきたすことは承知していたはずで、雑誌を存続させていくために

も、折衷的立場は必要だったのである。偏向を避けることは、雑誌継続の手段であったと言えよう。その意識と態度が直文の保身でもあった。

おわりに

明治二十二年、直文が行った御歌所派批判の背景には、西洋化という時代の潮流があることを見なければならぬ。同時期に直文は国内の西洋化を危惧し、日本主義再興を提言している。その再興の手段の一つとして国文学の台頭を挙げ、古来培ってきた伝統を基礎として進歩を意図する姿勢を示すのである。歌に対しても同様の姿勢を貫いていると言える。それ故、歌壇の一大勢力にもかかわらず、伝統の墨守に終始する御歌所派の態度が不満だったのである。

明治二十二年から同二十六年までの直文の和歌改良論を見てきたが、直文が一貫して主張しているのは、「景樹派」「真淵派」、「守旧派」「改進黨」等の流派に固執せず、それぞれの長所を斟酌する、まさに折衷論である。その根本にあるのが、歴史を顧みて、伝統を元に進歩を図るということである。つまり、改良の意識を持ちながら、両派を公平に重視しようとする直文の姿勢が看取されるのである。直文のこの折衷的改良論は「微温的」と評されることが多いが、新派の側に立てば、そのような評価にとどまるのは当然と言えよう。しかし、むしろ直文は主体的にその立場をとっており、当時の社会

状況や歌壇状況をよく見据えていた現実主義者であったように思われる。『新撰歌典』や『歌学』が発行された当時の歌壇は、御歌所派が勢力をふるっていたことは言うまでもなく、そのような状況下では、御歌所派を公に批判することはできなかったはずである。だからこそ、折衷的立場に立つという選択は当然であっただろうし、そうならざるを得なかったように思う。

明治二十七年、与謝野鉄幹が「亡国の音」を、同三十一年には正岡子規が「歌よみに与ふる書」を発表する。彼らの御歌所派批判に始まる短歌革新運動ばかりが注目されるが、それは直文の和歌改良論という土壌があったからこそその結果と言える。そして、彼らの登場以後には、直文の言説に変化を認めることができる。紙幅の都合により、明治二十六年までの改良論を検討するとどまったが、それ以後の詳細については、別稿にて論じる予定である。

【注】

(1) 「落合直文論―その歌論を中心として」(『国語と国文学』十五卷九号、一九三八年九月)。

(2) 以下、資料及び雑誌等の引用に際しては、通行の字体に改め、振り仮名は省略し、適宜句読点・濁点・カギ括弧を補った。引用文中に私に施す括弧は「〜」で示し、引用文に本来ある「〜」と区別した。傍線や波線は私に付した。

また、落合秀男編『落合直文著作集Ⅰ』(一九九一年 明治書院)は『著作集Ⅰ』、同『落合直文著作集Ⅲ』(一九九一年 明治書院)は『著作集Ⅲ』

とそれぞれ略す。

(3) 『近代短歌史 明治篇』(一九五五年 白楊社) 所収「第五章 近代短歌の発生 (明治廿六年―卅二年) 一 主情派短歌の発生」。

(4) 『近代短歌史における落合直文の位置』(『短歌研究』二十卷十一号、一九六三年十一月)。

(5) 「あさ香社の実態」(『短歌』四十八卷三号、二〇〇一年二月)。

(6) 『和歌文字講座 第九卷 近代の短歌』(一九九四年一月 勉誠社) 所収「落合直文 佐佐木信綱―明治二十年代の活動を中心に」。

(7) 『和歌文字講座 第九卷 近代の短歌』所収「黎明期―総論ならびに「あさ香社」の成立まで」。

(8) 拙稿「明治御歌所派歌壇の再検討―鉄幹・子規による批判をめぐって―」(『国文学攷』二〇一〇号、二〇〇九年三月) において、明治二十年代後半から三十年代前半に至る歌壇状況を明らかにした。

(9) 前田透著『落合直文―近代短歌の黎明―』(一九八五年 明治書院) 所収「第二章 直文前史」、附表「直文年表」による。また、正臣自身も「追悼録」中において述べている。

(10) 引用は、『著作集Ⅲ』による。

【付記】

注記のない限り、直文の言説の引用は原雑誌から行った。

本稿は、広島大学国語国文学会平成二十四年度研究会(平成二十四年七月八日 於広島大学)における口頭発表の一部をもとに執筆し、加筆修正を施したものである。席上および発表後にご教示を賜った諸先生方に深謝申し上げます。

― ちょうふく・かな、松江工業高等専門学校助教 ―